

主体的人間の内面構造

—有能な「駒」でなく賢明な「指し手」であるために

(平成 27 年 8 月 30 日提出, 10 月 20 日受理)

Internal Structure of Subjective Person
—Not an Able “Pawn” but a Wise “Origin”

奈良学園大学人間教育学部

梶田 叡一

KAJITA Eiichi

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：駒と指し手, 主体的人間, 内発的動機づけ, 社会的期待, 内面世界の構造

Abstract : In the rapidly changing situation toward globalized and knowledge-based society, the most crucial competency of people should be “subjectivity”. But many people might be not subjective nor independent but a “pawn”, that is “dependent person on outer social expectancy system”. Cross-examination of the dependent person and the subjective person from the view-point of psychological structure of inner world, especially inter-relationship among unconscious core-self and conscious world and outer social expectation system.

Keywords : Pawn and Origin, Subjective person, Intrinsic motivation, Social expectation, The structure of inner world

【「有能な駒」を育てるだけでよいのか】

有能な人間に育てていくということは、教育の目標として大きな重要性を持つ。特に今日のような変化の激しい時代には、先を読んで 10 年先 20 年先の社会状況に適切に対応できる資質・能力を身に付けさせていくことは、必須の課題である。こうした考え方に立ち、現在の子ども達が身に付けていくべき資質・能力を整理して列挙し、当面する主要な教育課題を明確化しようとする試みが、現在少なからず見られる。

こうした資質・能力のリストのいずれもが、情報化や国際化等々の進行する近未来の社会できちんと仕

事をし、自分に期待される役割を有効適切に果たしていく上で必要とされるもの（＝「我々の世界」を生きる力）は何か、を明確化しようとするものである。それはそれで重要な取組みであるが、不可欠な教育課題として、一人の主体的人間として充実した豊かな人生を生きていく上で必要とされる資質・能力（＝「我的世界」を生きる力）のことが見落とされがちになる、という拙い傾向が見られないわけでない。

子どもが身に付けていくべき資質・能力を考える時、何故「我的世界」を生きる面までを考えなくてはならないのか。これは、個々の人間を、社会の中でうまく位置付き、社会自体のために役立つ有能なパーツ

（「人材」＝人的素材）として見てはならないからである。個々人こそが基本的に重要であるという視点、「社会のための個々人」でなく「個々人のための社会」でなくてはならないという視点、を堅持しなくてはならないからである。

ちなみに、ここで想定している個々人とは、自立した主体性を持つ人間ということであり、基本的には、自分自身の「我的世界」に根ざして判断し行動し生きていく人間である。言い換えるなら、自らの外側にではなく内面世界に、基本的な動機づけの源泉や判断の準拠枠（フレーム・オブ・リファレンス）を持つ、ということである。

（チェスや将棋の）「駒」（Pawn）になるのか、「指し手」（Origin）になるのか、という象徴的な視点に立って、この問題についての研究をおこなったド・シャーム^{（注1）}は、次のように述べている（原訳文と少し言葉遣いを変えたところがある）。

「指し手」というのは、自己の運命を支配しているのは自分自身であると感じている人のことであり、自分の行動の原因を自分自身の中に感じている人のことである。「駒」というのは自分はふりまわされていると感じ、運命の糸は他者ににぎられていて、自分は操り人形にすぎないと感じる人である。……

「指し手」と感じている人は積極的で、楽観的で、自信があり、挑戦を受け入れる。「駒」は消極的であり、自己防衛的であり、決断力に乏しく、挑戦を避ける。「指し手」は自分には潜在的な力があると感じており、「駒」は無力と感じている。……

人間は常に「指し手」であるということはないし、常に「駒」の人もいない。しかし、誰でもどちらかの傾向が強いのがふつうであるから、結局その人の性向がどちらに傾いているかを示す概念として用いることができよう。その個人の性向に加えて、さらに状況からの制約を受ける。状況によっては「指し手」を生じやすかったり、「駒」を誘い出したりもする。……

ド・シャームの指摘する「指し手」と「駒」という対照的な在り方は、社会的状況において人が主体的であるかどうかを峻別する上で、シンボリックな有効性を持つ。ここで、「指し手」とは内発的動機づけ（知的好奇心や達成動機など）に因って、すなわち内的な促しや志向性に従って行動する者、「駒」とは外発的な動機づけ（外的社会的な指示や報酬）に因って行動する者ということである。その人を動かす基本的な原

動力となるものが、その人の外部にあるのか内部にあるのか、という視点から2つの概念が区別されているのである。これは、我々が以下の論を進めていく上でも基本的な視点となるものである。

ただし、内発的動機づけで動く「指し手」は積極的で楽観的で自信を持ち……とし、外発的動機づけで動く「駒」は消極的で自己防衛的で……としているド・シャームの捉え方は、事実認識として必ずしも妥当でない。外発的動機づけで動く「駒」としての在り方をする人であっても、明るく活発な人は少なくない。さらには、自分が外発的動機づけで動いていること自体に十分気付いていない人も多いように思われるし、そうした無自覚な「駒」にも積極的で楽観的で自信を持ち……ということが見られないわけでない。

例えば、何者かに心底から忠誠を誓う熱狂的な信徒者の姿を、歴史的にはヒトラー・ユーゲントの若者の姿に、また大小さまざまなカルト的新興宗教に入信した狂信的信者の姿に見ることができるのではないだろうか。もっと身近には、どんな組織の中においても上部の決定に対して何ら疑問を持たうともせず、常に良き組織人としてその決定に無条件に従う人達の姿は、そう珍しいものでない。彼らは基本的に外発的動機づけで動く「駒」なのであるが、多くの場合、それなりの心理的安定性と満足感、幸福感を持っているのである。また、「指し手」である人は楽観的で……と、常に幸福感に満たされているかのように描いている点も、事実認識として疑問を持たざるを得ない。「指し手」であり続けることは外的な期待の体系との間に不断の緊張関係を生み、また内的にも様々な葛藤を持つことが想定される。したがって、ド・シャームが言うような常時ハッピーで自信に溢れた姿でおれるかどうかは疑問である。もちろん長い目で見た場合には、「指し手」は自分自身に誠実であり続けることから（ユング等の言う意味における）自己実現を着実に進めていくことになり、心理的な内面構造の点でも安定した活力あるものになっていくであろうが……。

【有能な「駒」でなく「指し手」となるためには】

教育は個々人に様々な資質・能力を身に付けさせ、「有能な人間」に育てあげていく営みである。しかしながら、問題は、そうした「有能さ」を使いこなす主体としての育ちがそれに伴っているかどうかである。例えば、OECDが強調する「キーコンピテンシー」^{（注2）}や、経済産業省が発表した「社会人基礎力」

で挙げられている資質・能力^(注3)は、いずれも重要で首肯できるものであるとしても、そこに主体としての育ちが伴っていないと、単に「有能な駒」が育つだけのことになるのではないだろうか。

ここで新たな課題となるのが、「指し手」としての資質をどう実現していけばいいか、ということであろう。逆の面から言えば、単なる「駒」でしかないというのは人間としての基本的なあり方の何処にどのような問題があるのか、そうしたあり方を是正するにはどうしたらいいのか、ということである。

自分自身の内的な世界に依拠して動くことをしない「駒」としてのあり方に、我々は基本的に3つのタイプを区別したいと思う。いずれも、判断や行動がその人の外部世界に原動力や基本的枠組みを持つ形で行われ、その人の内面世界に根ざすといったあり方ではないという共通点が存在する。

第1は、「外的な指示・命令のままに動く」という「被指示型タイプ」のあり方である。人の性向としては「指示待ち人間」がその典型であろう。また状況の点でいえば、集団スポーツの練習の場面、軍隊生活での訓練の場面、大規模工場での流れ作業の場面、などが典型的なものとなるのではないだろうか。

第2は、「外的な期待を具体的な形で受け止め、その通りに動く」という「期待適応型タイプ」のあり方である。人の性向として言えば、自己に対する役割期待を敏感に察知し、その期待通りに動こうとする「役割人間」であり、その期待に応えるため「肉付きの仮面」として動く人である。また状況との関わりで言うならば、警官や教員など、外部からステレオタイプの役割期待を持たれがちな職に就いている人の場合が典型的と言ってよい。

第3は、「外的な報酬(利害・評判・賞罰など)を察知し、それを獲得するように動く」という「外的報酬追求型タイプ」のあり方である。これは、社会的状況の中で繰り返し学習され強化されていくものであって、現代人の性向として一般的かつ強固なものである。社会的成功を目指して頑張る「上昇指向の高い」人は、その典型であろう。また状況との関わりで言えば、個々人を競い合わせることによって社会の発展を目指す新自由主義的な「競争社会」の状況こそがまさにそれであり、そこでは「外的報酬」の獲得を目指す各自の努力が強調され、そこでの競争が美化されて語られることになる。

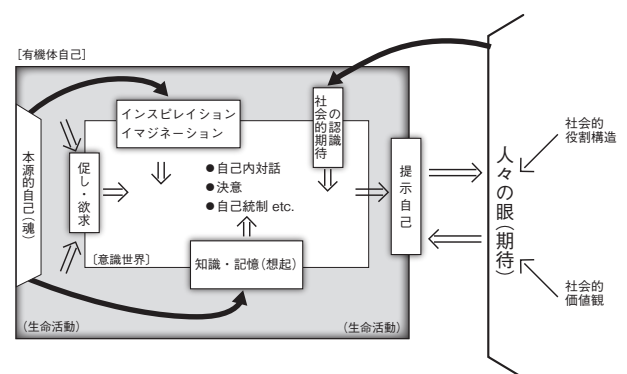
これら3つのタイプのいずれであっても、必要とされる資質・能力を身につけた「有能な駒」として動い

てくれるならば、「指し手」の立場からは、つまり「外部から指示・命令する人」、「外部から役割期待をそれとなく投げかける人」、「外的な報酬をちらつかせて一つの方向で働かせようとする人」の側からは、非常に好都合ということになる。しかし、あらためて言うまでもないが、有能な「駒」である限り、自分自身の人生の主人公として生きていく「指し手」としての姿は欠落するか、きわめて貧弱なままであるか、ということにならざるをえない。

【「駒」の内面世界の構造と、その克服の方向性】

問題となるのは、どのようにしたら「駒」の位置から抜け出し、「指し手」の位置を獲得できるのか、そのために必要な資質とは何であるのか、という点にある。これを、個々人の内面世界のあり方という視点から検討してみることにしよう。

「駒」と「指し手」とでは、その内面世界の基本構造にどのような相違のあることが想定されるのであろうか。筆者は先に、「＜我々の世界＞における有機体自己と意識世界^(注4)」を検討する中で、人の内面世界の基本構造を試論的に提示した。この概念図に少し加筆したものをここに図1として示しておくが、これを踏まえて考えるならば、少なくとも個々人の内面世界を構成する「本源的自己」「意識世界」「提示自己」と、社会的な位置・役割体系への組み込まれから来る「外的期待」、といった4つの世界の間の相互関係を、ここで問題としなくてはならなくなるであろう。



【図1】 有機体自己・意識世界・社会的期待

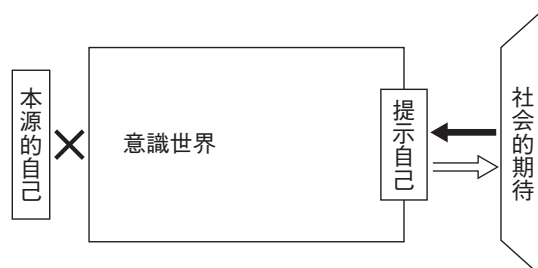
ここで「本源的自己」と呼んでいるものは、現象的な「意識世界」の背後にあって、その世界をそのような形で成立させている意識されない暗黙の世界のことである。これを私は以前「内的自己」という言葉を用いて論じてきたが、十分な理解が得られないくらいがあるので、ここでは「本源的自己」と呼ぶことにす

る（注5）。

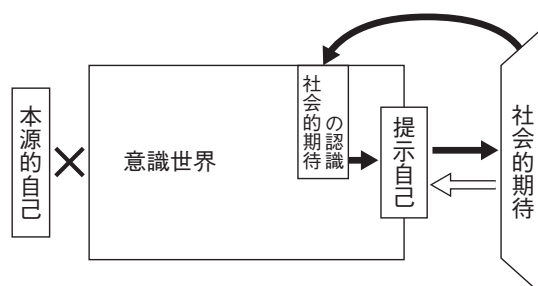
「駒」である人の内面世界の構造について考えてみるならば、まず第1の「被指示型タイプの駒」の場合であるなら、「外的な期待」が直接的な指示・命令という形で個々人に突き付けられ、「提示自己」はまさにその通りの姿であらねばならないという前提のもとに整えられることになるであろう。また「意識世界」は、そうした「提示自己」を支えるものになる場合が多いであろうが、基本的には「提示自己」を阻害しない限りどのような在り方をしてもよい。「本源的自己」はここではほぼ無関係のままである。

第2の「期待適応型タイプの駒」の場合であるなら、「意識世界」は積極的に「外的な期待」が奈辺にあるかを察知しようと努め、それに添った「提示自己」の姿になるよう努めるであろう。この場合には、本来の「意識世界」は「提示自己」と無関係のままになり、また「本源的自己」も無関係のままでよいことになる。

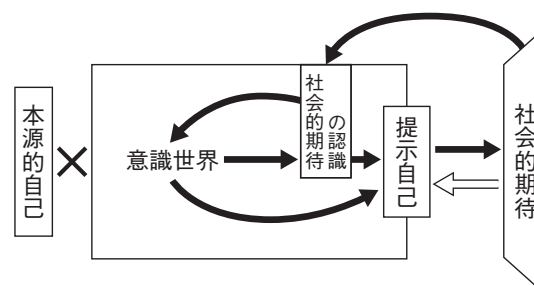
第3の「外的報酬追求型タイプの駒」の場合であるなら、「意識世界」は積極的に「外的な期待」が奈辺にあるか、それを達成した場合にどのような外的報酬（利益・拍手・賞）があるか、また達成できない場合にどのような不利益があるか、を認識すると同時に、それに添った「提示自己」となるよう努めることになる。この場合にも、「意識世界」は「外的な期待」の世界に搦め捕られたものであるが、格段に積極的に、「意識世界」の全てを挙げて外的報酬獲得の方向に自分自身を駆り立てていこうとすることになるであろう。いずれにせよ、この場合にも「本源的自己」はほとんど関係することはない。



【図2-1】 被指示型人間の基本的在り方



【図2-2】 期待適応型人間の基本的在り方



【図2-3】 外的報酬追求型人間の基本的在り方

これら3つのタイプの「駒」の在り方に共通している最も大きな問題点は、「意識世界」そのものが「社会的期待」にどう応えるかという色彩に覆われていることであり、「本源的自己」からの内的促しが関係してこないままになっているという点である。「提示自己」は、そうした「意識世界」を忠実に反映したものとならざるをえない。こうした内面世界のあり方であっては、世の中で動いていく際の心理的土台として、その人自身の実感は問題とならなくなり、自分で納得していること、自分の本音であることも、問われる余地がないまとなる。「本源的自己」との連携を欠いたまま世の中的な周囲の世界で表面上うまくやっていくことになるであろうが、それはまさに「虚ろな適応」でしかないであろう。

「意識世界」に「本源的自己」に根ざした内的促しが生じ、それを実現していく上での重要な諸条件の一つとして外的世界の在り様や報酬体系を、そこからく自分自身に寄せられている期待などを見てとり（現実検証）、そうした諸条件をも勘案した上で外部世界に対する自分自身の押し出し方（自己提示）を決めていく、ということであれば、まさに主体性を持つ「指し手」としての在り方となるはずである。これはアイデンティティの在り方から言えば、「位置付けのアイデンティティ」でなく「宣言としてのアイデンティティ」で動く、という在り方であると言ってもいい。まずはそうした方向性に向け、内面世界の在り方の再構成が図られなくてはならないであろう。

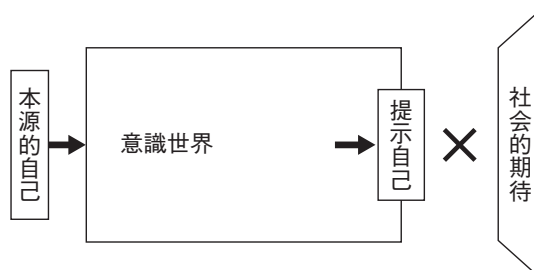
【「指し手」の内面世界の構造をめぐって】

「指し手」は内的な促しや方向づけで動く、という基本特性を持つわけであり、これを実現する上で最も肝要なのは、「本源的自己」に根ざした言動、生き方を実現するということである。しかし、ここにもまた、大きな落とし穴が待っていることに十分な注意が必要

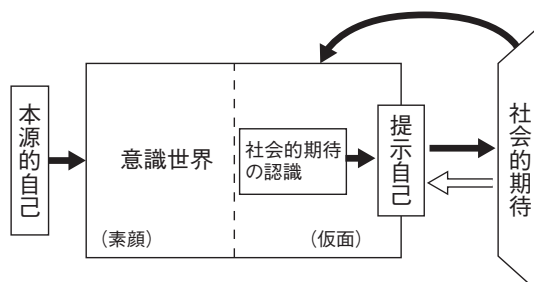
である。「本源的自己」に根ざすという点ではいいとしても、それをそのままの形で世の中的な場に表出していこうとするならば、周囲との軋轢が避けられなくなるからである。

例えば、内的促しを頑固なまでに押し出して世の中的な場に処していこうとする場合、「自己主張型の(困った)指し手」と呼ぶ以外にない姿となるであろう。アイデンティティ論から言っても、「位置付けのアイデンティティ」のことは考えないで、「宣言としてのアイデンティティ」ばかりで動かれては端迷惑ということがあり、またこれでは最終的にうまく行かない、ということもあるのではないだろうか。「空気の読めない人」「自分勝手な人」と呼ばれるのは、まさにこういう人達である。

もう一つ、「本源的自己」に根ざしてもいるし、また「社会的な期待」に応じた形で「自己提示」もしているのではあるが、両者の間に連携がないという場合がある。具体的には、内的な促しを含め意識世界の大事な部分は常に内秘的にリザーブしておき、外側の世界に見せる発言や態度は周囲の期待に添ったものにする、というやり方である。素顔と仮面の分離であり、使い分けであり、その場その場に応じた一時的な戦術的適応の仕方を連続的に行使する在り方と言ってもいい。今日の社会では現実に、多かれ少なかれこうした在り方でもって世の中的な場に処している人が少なくないであろうが、これは心理的に疲れる方策である。これをここでは、「仮面・素顔分離型の指し手」と呼んでおくことにしたい。



【図3-1】 自己主張型人間（困った「指し手」）の基本的在り方



【図3-2】 仮面・素顔分離型人間（小利口な「指し手」）の基本的在り方

「本源的自己」と十分な形で繋がりがながらも、「社会的期待」にも応じられるような在り方をしていこうとするならば、「意識世界」における多面的な現実検証と賢明な調整作業が十分な形で行われなくてはならない。基本的には先に図1として示したところが、「意識世界」を中心としてうまく統一的に動いていくことが必要となるであろう。「本源的自己」からの内的促しを大切にし、それを実現していくための現実的なチャンネルを、現実世界の構造を吟味検討していく中で何とか見付けていき、自分自身に対して寄せられている「社会的期待」にも応じつつ、場合によってはその「社会的期待」に対して変更を迫るよう働きかけをしつつ、自分自身の実感・納得・本音の世界に依拠しつつ活力に溢れた粘り強い活動をしていかねばならないのである。

こうした賢明でタフな「指し手」をどう育て上げていくか、これが人間教育という視点から見た場合の最も基本的な教育課題と言ってよいであろう。特に、「本源的自己」との連携を深めていくための手立て、また内的促しと「社会的期待」への対応との両者を共に生かしていく具体的チャンネルを見つけていくための手立てを、発達段階に応じ、逐次的に教育していかなければならない。Project-based（企画追求型）の学習や Problem-based（問題解決型）の学習、さらには反転授業などといった手法を用いるアクティブ・ラーニング（主体的能動的な学習）が、内的な促しと社会的期待への対応とを「意識世界」での統合的な努力によって適切な形で調和させる、といった展望の下に実践されるならば、賢明でタフな「指し手」を育てる一つの可能性が開けるのではと思われるが如何であろうか。

【注】

（注1）R.ド・シャーム（佐伯胖訳）『やる気を育てる教室—内発的動機づけ理論の実践』金子書房、1980年。ここでの引用は、訳書のp7～8。

（注2）OECD（経済開発協力機構）は、加盟各国が参加した「コンピテンシーの定義と選択」プロジェクトを1997年から始め、「個人の人生の成功と社会の持続的発展に貢献できる上で鍵となる能力（キーコンピテンシー）」として、次のような3つのカテゴリーにわたる9種の能力を挙げている。

（1）社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力

A 言語、シンボル、テキストを相互作用的に活用する能力

- B 知識や情報を相互作用的に活用する能力
 - C テクノロジーを相互作用的に活用する能力
- (2)多様な社会グループにおける人間関係形成能力

- A 他人と円滑に人間関係を構築する能力
- B 協調する能力
- C 利害の対立を御し、解決する能力

(3)自律的に行動する能力

- A 大局的に行動する能力
- B 人生設計や個人の計画を作り実行する能力
- C 権利、利害、責任、限界、ニーズを表明する能力

(注3)経済産業省が2006年に公表した「社会人基礎力」では、次のような資質・能力の項目が挙げられている。

(1)前に踏み出す力(アクション)

主体性[物事に進んで取り組む力](指示を待つのではなく自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む、等)

働きかけ力[他人に働きかけ巻き込む力](「やろうじゃないか」と呼びかけ目的に向かって周囲の人々を動かしていく、等)

実行力[目的を設定し確実に行動する力](言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し失敗を恐れず行動に移し粘り強く取り組む、等)

(2)考え抜く力(シンキング)

課題発見力[現状を分析し目的や課題を明らかにする力](目標に向かって自ら「ここに問題があり解決が必要だ」と提案する、等)

計画力[課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力](課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし「その中で最善のものは何か」を検討しそれに向けた準備をする、等)

創造力[新しい価値を生み出す力](既存の発想にとらわれず課題に対して新しい解決方法を考える、等)

(3)チームで働く力(チームワーク)

発信力[自分の意見をわかりやすく伝える力](自分の意見をわかりやすく整理した上で相手に理解してもらえるように的確に伝える、等)

傾聴力[相手の意見を丁寧に聴く力](相手の話しやすい環境をつくり適切なタイミング

で質問するなど相手の意見を引き出す、等)

柔軟性[意見の違いや立場の違いを理解する力](自分のルールややり方に固執するのではなく相手の意見や立場を尊重し理解する、等)

状況把握力[自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力](チームで仕事をするとき自分がどのような役割を果たすべきかを理解する、等)

規律性[社会のルールや人との約束を守る力](状況に応じて社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する、等)

ストレスコントロール力[ストレスの発生源に対応する力](ストレスを感じることがあっても成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する、等)

(注4)梶田叡一「自己意識と有機体自己と社会的自己と」『奈良学園大学紀要』第2集, 2015年, 3月, p43~49.

(注5)梶田叡一『内面性の心理学』大日本図書, 1991年, p92~109, を参照。